



# 九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.230

2013(平成25)年12月 9日(月)発行

- <朝日新聞・俳壇/歌壇 〇「瓦礫山越えて帰燕となりにけり」(南相馬市・吉岡朝雄)
- 福島県民の作品より> 〇「端居して帰れぬ家を想ひをり」(南相馬市・山崎秀夫)
- 〇「福島より避難生活二年九カ月われも夫も疲れ果てたり」(東京都・半杭螢子)
- 〇「満月は海より上り原子炉と人無き街と村とを照らす」(福島市・美原凍子)
- 〇「話さねばさみし話せばなおさみしすり抜けていく風を見ている」(福島市・美原凍子)

## 3.11東日本大震災への思い 34

### 「たのむぞ おとな」

南相馬市原町区 大貫昭子

(福島県立原町高校教諭・県立高教組女性部長・本会会員)



#### 私たちの犠牲の上に

あの日まで、誰もが夢を持っていた。将来の生活をどうするか思い描いていた。福島に残った人も離れた人も、子供も大人も、若者も老人も。いったい、どうしてこうなってしまったのだろう。原発を再稼働しようと躍起になっている電力会社の幹部にも夢があるのだろう。「原発はコントロールされている」としゃあしゃあと言い、オリンピック獲得を誇らしげにしている彼にも夢はあるのだろう。

しかし犯罪者である彼らの夢と、私たちの夢は、決して近づくことも交わることもないのだろう。彼らの夢はここに住む私たちの犠牲の上にある。

#### 母校を失い、友だちと引き裂かれ...

3.11以降、たくさんの高校生が自分の母校を失った。友達と引き裂かれた。親と兄弟姉妹と祖父母と離れ離れになって生活している高校生は今でもたくさんいる。当時私が勤務していた小高工業高校では、毎年10名前後の優秀な生徒を第一原発に送り出してきた。彼らにとっても保護者にとっても、それは誇りであった。いま彼らは、あの第一原発の中で働いている。

20キロ圏内での職場を失った小高工業高校のクラスの子は、今除染の仕事をしている。日当9000円で。「身体には気を付けて」としか言えない。

#### 教師として若者に夢をどう語れというのか

相馬の漁師と結婚した前任校のクラスの子、彼女の夫は魚を獲ることが好きで好きで、自分の仕事を誇りにしていた。「津波が来たら船を守れ」という教えの通り、あの津波の中、船を沖に避難させた。命が残り、船も守った。そんな彼が今は魚が獲れずに瓦礫を処理している。今の仕事に誇りが持てないと叫ぶ。

教師の私は、これから社会に出る若者に、真実を学ぶことの大事さを語り、社会をつくりあげるのはあなたたちだと語ってきた。まだ、二

十代の彼らに、どう夢と希望を語れと言うのか、立ち止まってしまう時がある。

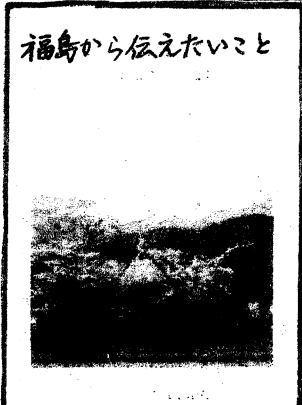
#### 福島の実情を話して、視察の案内も「もう復興しているのかと思った」

3.11以降、いろいろな所で話をする機会をいただいて、福島の実情を、収束していない現実を話してきた。昨年、福島をこの目で見たいという人が視察に来るようになり、今年は昨年以上の人が相双地方にやってくる。プレハブ校舎、人のいない小高工業の校舎、請戸の海、そこから見える原発の排気塔、人のいない浪江町……。ここに入るのに通る飯館の景色。「言葉失う」とその人たちは言う。「もう復興しているのかと思った」と言う。

そうなんだ、全国版では福島は収束したことになっているのだから。農民連や原発訴訟団、地方労連や県立高教組のOBの先生方、たくさんの方が力を出し合い、知恵を出し合ってこの視察をつくりあげてきた。多くの人がそれぞれの立場で怒りや苦しみを語っている。

#### 生徒と教員の被災文集を発行

福島県立高校教職員組合の女性部でも、文集を1、2集とつくり、全国の方に読んでいただいている。文集を作る過程で学校外の多くの方と知り合いになり、その苦しみや怒りを少しでも共有できることができ、福島の抱える苦しみをより深く大きく知ることまでできている。



福島県立高校教職員組合女性部が発行した▲被災体験文集「福島から伝えたいこと」。生徒や教員の大震災体験がリアルに記録されていて貴重です。600円で頒布しています。

(前ページより)

「あなたたちの世代は何をしたのですか」

そのような活動の中で、私たちの先輩でもある、いわき市で高校教師をしておられた吉田信氏が1984年に作った詩を知った。

「重い歳月」 吉田 信

(前略)

しかし原発はいつの日か  
必ず人間に牙をむく  
この猛獣を



曇りのない視線で監視するのが私たちだ  
この怪物を否定するところに  
私たちの存在理由がある

私たちがそれを怠れば  
いつか孫たちは問うだろう

「あなたたちの世代は何をしたのですか」と

今、再び私たちは問われている。「あなたたちは何をしたのですか」と。孫に「その時、ばあばは何をしていたの」と問われた時、「あのね…」と語れる生き方をしたいと思う。ここに住む大人がすべきこと、教師がすべきこと、これからの世代に少しでも夢のある故郷を残すために、私たち世代がすべきことを考えていきたい。怒りを連帯の力に変えて。

「教師になりたい」と言う生徒たち

今年の夏、部活動の県大会の時、宿舎で3年生の男子と語り合った。彼らは「教師になりたい」という。「なんでまた」とその理由を聞けば、「学校は楽しい」「先生たちは楽しそうに授業をしている」と言う。県教委の思いとは別に、私たち教師はあの日から「今まで通りの学校生活を一日でも早くつくりあげよう」とやってきた。子供らにとって、すべてが変わってしまったこの地で、「異常」な生活の中で、学校は今までと何も変わらない安心できる場所であることが大切だったのだと、後になって気づかされた。彼らが夢を持って、希望と不安を抱いて社会へ飛び出していくのは、今も昔もどこも同じである。「負けるな!」と背を押す私たちも、前に進まなければならない。

外の世界に飛び出していく若者。そして、この地においてこの地に帰ってきて、もがいて入口を探している若者。そしてまだその未来は遠くにある小さな子供たち。

福島の未来の入口が見えるように

「たのむぞ、おとな」…今年の全教女性部の全国学習交流集会の合言葉である。ひとりひとりの力は小さくても、それをつなぎ合わせて強く大きくして、福島の未来の入り口が見えるよう、私たちは「たのむぞ、おとな」と背を押されている。

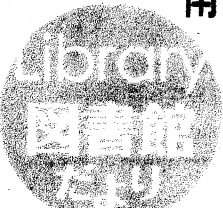
(2013.10.8記)

「これで憲法がわかる」

南相馬市立中央図書館に「

鈴木安蔵の出身地ならではの企画

憲法」特集コーナー



中央図書館  
☎7789



○JR原ノ町駅前の南相馬市立中央図書館では、「憲法に関する本の企画展示コーナー」を特設し、憲法の基本書から専門書まで、122冊を揃えています。

○映画『日本の青空』のモデルで、日本国憲法の原文案作成の憲法学者鈴木安蔵(1904~1983)の出身地(南相馬市小高区)ならではの図書館の企画です。

追悼 「絶望の隣は希望です！」

やなせたかし「アンパンマン」

- ◆「声高に語る正義はうそくさい。正義というのは相手をやっつけることではなく、ひもじい者に食わせることだ」
- ◆「戦争はどんな理由でもいけない。正義のための戦争なんてない。計画的殺人だ」 ◆「生きているからこそ悲しいし、病気になる」
- ◆「人生は、自分でつかむ運・鈍・根(根気)の三つが大事です」



★「アンパンマン」の作者、漫画家やなせたかし(本名・柳瀬 嵩)さんが、10月13日、94歳で死去されました。  
★1919(大正8)年東京生まれ、少年時代を高知で過ごす。召集され、中国の戦線ですさまじい飢餓に直面した戦争体験がもとになり、アンパンマンが我が身を食べさせるという自己犠牲に反映したそうです。